

巡礼体験における熊野参詣道伊勢路の装置性に関する研究

～熊野参詣道伊勢路の価値再考～

Study on the Space Structure of Kumano Pilgrimage Route Iseji in the Experience of Pilgrimage

－ Re-examination of Value of Kumano Pilgrimage Route Iseji －

伊藤文彦

ITO Fumihiko

1. 序論

第1章の序論では、研究の背景と目的、既往研究からみる本研究の位置づけ、本研究の構成と方法について整理を行った。

本研究は熊野参詣道伊勢路の価値について再考するものである。熊野参詣道伊勢路(図1)は、伊勢と熊野を結ぶ巡礼路で、2004 年に一部が世界遺産に登録された。その後の10 年間で観光客が3倍に増加するなど、変化は著しい。その一方でマラソン大会が企画されるなど、今後の持続可能な保護に悪影響を与えかねない事態も発生している。こうした事態が発生している原因は、世界遺産登録資産のほとんどが道に限定され、さらに登録区間(史跡指定区間)は断続的で、特に近世の道が遺構として良好に遺存している区間に限定されていることにありと思われる。しかし、世界遺産登録推薦文書にも記載されているとおり、熊野参詣道伊勢路は17 世紀以降、多くの巡礼者がこの道を旅したということが重要であり、そのことがこの道に価値を与えていると言ってよい。そこで本研究においては、近世巡礼者の巡礼旅において熊野参詣道伊勢路がどのように機能していたかを把握し、既に指摘されている上記価値を含めその価値を明確化する。次いで、従来指摘されている価値の記述との比較から熊野参詣道伊勢路の価値およびその成立要件を再考することを目的とした。巡礼者は道を辿って空間を移動しているのであり、道だけでなくその空間の展開にも何らかの価値があると思われる。

熊野参詣道伊勢路に関して、その巡礼旅の実態について検討した先行研究は極めて少ない。熊野参詣道のルートについては、現地踏査と聞き取り調査を元に記述した三重県教育委員会の調査があり、峠道を中心とした特定の区間における巡礼旅については、道中案内や道中日記の記述をとりまとめた三重大学を中心とした研究がある。また、熊野参詣道伊勢路は西国三十三所巡礼の起点部分に当たると指摘したものとして田中智彦の研究がある。しかし、近世の伊勢と熊野の区間全体について、巡礼旅の実態を把握した研究はない。本

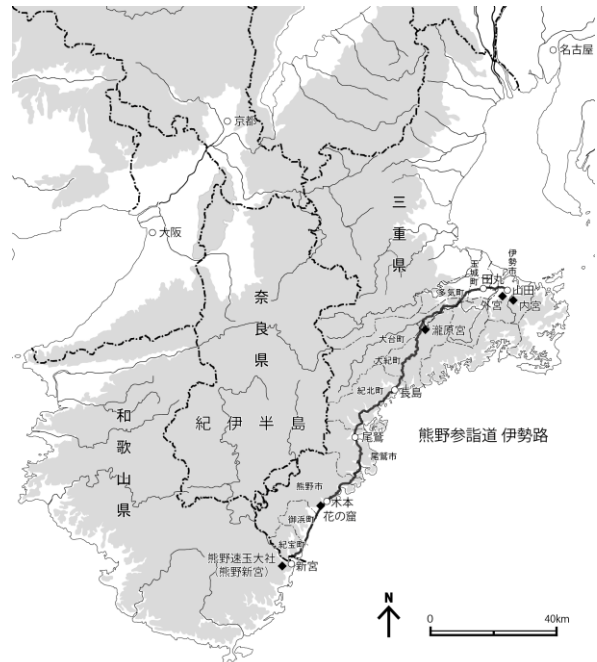


図1 熊野参詣道伊勢路位置図

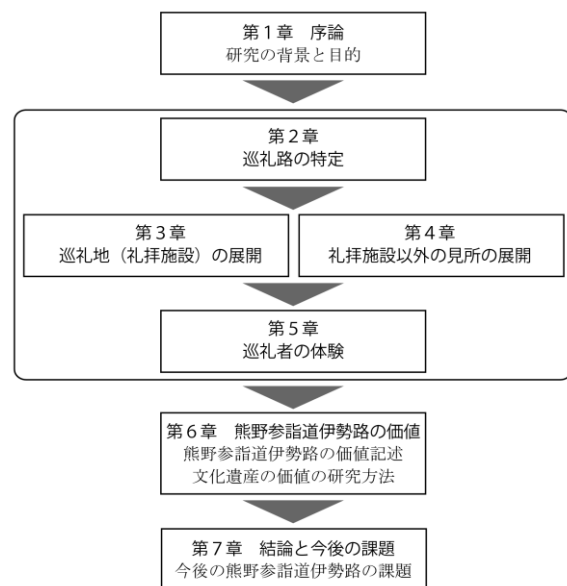


図2 本研究の構成

研究は熊野参詣道伊勢路における巡礼旅の実態を巡礼者の体験から解明するものとしては初めての研究である。

検討に当たっては、田中智彦が示した巡礼の三要素である、巡礼路、巡礼地、巡礼者の3つの観点から分析を行う。また、巡礼地については、礼拝施設とそれ以外の施設とに分けて分析を行う。次いで、熊野参詣道伊勢路の価値の記述を行い、価値が構成されるモデルを提示する。さらに、本研究が明らかにする熊野参詣道伊勢路の価値と、現状の価値付けの状況とを比較することで、今後の保護への課題を提示する(図2)。

2. 巡礼路の特定

第2章では、未だ不明な箇所が残っている巡礼路について実態解明を試みた。

研究方法是、17 世紀から 19 世紀前半に発刊された道中案内(ガイドブック)および三重県教育委員会などがこれまでに実施した調査結果による文献調査から地名や道に関する情報を収集し、現地踏査によって地勢的条件や道路遺構などを確認した。

初めに、道中案内の地名から基本的経路を把握し、17 世紀末から 19 世紀にかけて基本的経路に変化がないことを明らかにした。また、巡礼路の起点は伊勢山田であり、新宮まで連続した道であったことが改めて確認された。次いで、道中案内に示される選択的経路について整理を行った。選択的経路には礼拝施設へのまわり道(瀧原宮、天狗岩窟、清水寺)、安全確保のためのまわり道(大内山川渡河、川の渡し船)、近道・歩きやすい道(三木里から曾根・新鹿の海路と陸路、長嶋から新宮、木本の海路)が存在し、巡礼者が旅をする上で必要に応じて選択的経路を利用できたことを明らかにした(図3)。また、基本的経路と選択的経路は相互補完的であることを指摘した。

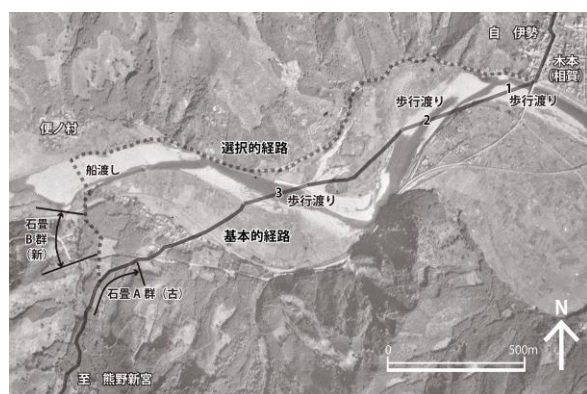


図3 選択的経路の一例(銚子川渡河・安全確保)

3. 巡礼地(礼拝施設)の展開

第3章では沿道の巡礼地(礼拝施設)について、その立地と巡礼における機能の面から実態解明を行った。研究方法是、17 世紀から 19 世紀前半の道中案内で継続的に出現する重要な礼拝施設について抽出を行い、文献調査や現地踏査によってそれぞれの礼拝施設の特性を把握した。

その結果、17 世紀から 19 世紀に至るまで継続して道中案内に掲載される 5 つの礼拝施設(瀧原宮、天狗岩窟、日輪寺、清水寺、花の岩や)を抽出できた。これら礼拝施設はいずれも中世以前に起源を持ち、近世には伊勢神宮や熊野三山といった巡礼の起点や目的地、また西国三十三所巡礼に関連付けられていたことが明らかとなった。たとえば、八鬼山日輪寺は本尊の三宝荒神立像が天正4年の銘を持ち、創建が中世末期に遡る。一方、脇侍には阿弥陀、薬師、観音と17 世紀以降の道中案内に記され、現在、日輪寺の堂宇内には 19 世紀に下るとみられる石像の阿弥陀、薬師、観音像が安置される。阿弥陀、薬師、観音は熊野三山の本地仏であり、熊野三山との関係を想起させる。さらに、日輪寺との関係が指摘される八鬼山町石はいずれも伊勢山田からの寄進で、近世の道中日記にはそのことを記すものがある。さらに日輪寺は西国三十三所巡礼の前札所という言説が今日なお広く尾鷲周辺で流布している。このように日輪寺は、伊勢、熊野、西国三十三所巡礼と関連付けられた礼拝施設として近世には認識されていたものと考えられる(図4)。

このほか、また、17 世紀には礼拝施設が存在していなかった伊勢近傍にあっても、18 世紀には新たな礼拝施設が出現していることが明らかになった。たとえば、三重県度会郡玉城町原に所在する観音庵(石仏庵)は旧境内の石造物の悉皆調査の結果、寺院の整備は文化2年を遡らないと考えるのが妥当と判断できるとともに



図4 日輪寺堂内の石造熊野三山本地仏坐像

三十三体観音石仏や巡礼道引観世音の標柱により意図的に巡礼に関連付けがなされた状況が看取できた。

さらに、これら礼拝施設の立地について検討すると、地形との関係では、渡河地点や傾斜変換点といった街道の状況が変化する地点や急傾斜地など、人間が生理的に立ち止まる地点に設置されることが明らかとなった。さらに伊勢から熊野までの行程との関係では、巡礼者の1日の行程ごとに1箇所以上の礼拝施設を通過するように配置されていることが明らかとなった。

以上の結果、これら礼拝施設は巡礼者が自身の旅を、伊勢を起点とし熊野へ向かう巡礼旅であると認識し、旅の方向が正しいことを確認する機能を果たしており、礼拝施設の存在によって伊勢と熊野を結ぶ街道は「参詣道」として認識されたと考えられる。

4. 礼拝施設以外の見所の展開

第4章では、礼拝施設以外の見所について検討を行った。研究方法は、17世紀から19世紀前半の道中案内から多くの道中案内で紹介記事が出現する見所について抽出を行い、文献調査や現地踏査によってそれぞれの見所の特性を把握した。さらに、19世紀半ばに執筆された『西国三十三所名所図会』に掲載された伊勢から新宮の区間の挿絵について分類を行い、見所の特性を把握した。

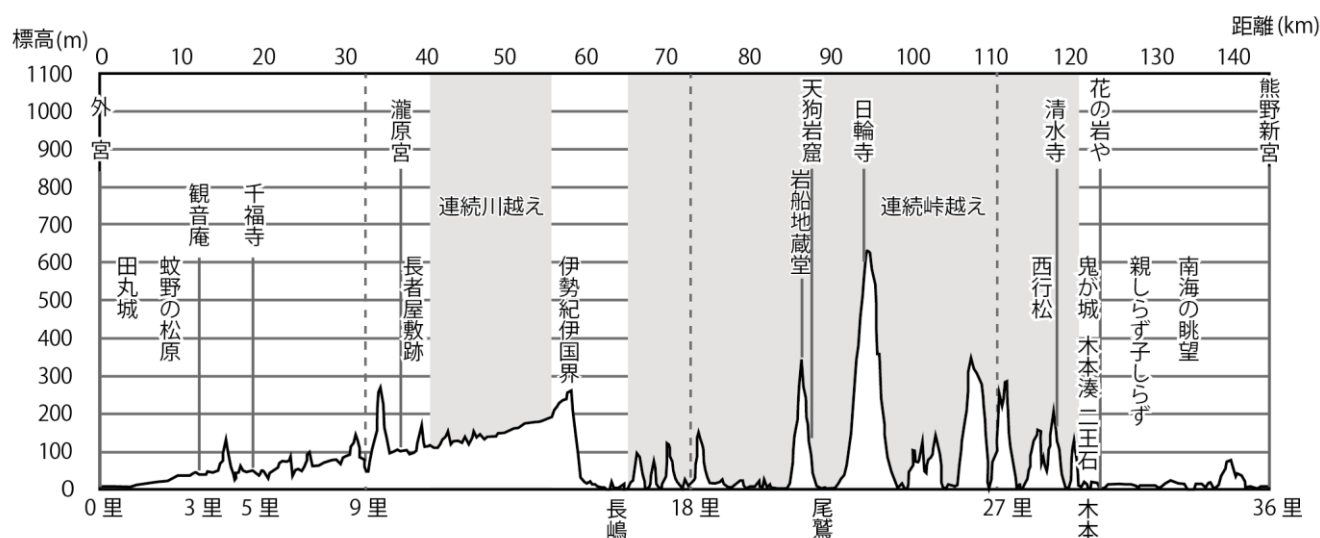
その結果、17世紀から19世紀にいたる道中案内や『西国三十三所名所図会』に挿絵を付して掲載される、10箇所の見所(田丸城、蚊野松原、長者屋敷跡、伊勢紀伊国界、瀧原宮、千福寺、観音庵、連続川越え、天狗岩窟、岩船地藏堂、日輪寺、連続峠越え、清水寺、西行松、花の岩や、鬼が城、木本湊、三王石、親しらず子しらず、南海の眺望)を抽出できた。これらは伊勢神宮・熊野三山・西国巡礼に関連しない一方、

いずれも地理や文学、故事、伝説、宗教に関連付けられた意味の風景を構成していることが明らかとなった。

たとえば、新鹿から波田須へ向かう坂の頂上に位置する西行松(図5)はその一例である。19世紀半ばの道中案内である『西国順礼道中細見大全』(1840)は、「峠ニ西行の松」として紹介する。しかし、17世紀末の『西国三十三所道しるへ』(1690)は、「さがり松とて二本一所にはへ■枝のさかりたる松あり」と記すのみであり、18世紀前半の順礼案内記(1728)も「峠にほうじの松有名木なり」とあって、西行の名は記さない。しかし、18世紀後半の『西国巡礼細見記』(1775)に至り、「峠に西行の松あり」と、西行の記述が初めて登場し、以降は西行の記述が継続する。さらに今日では「地元の子どものやりとり」に自らの才能の無さを嘆いた西行がこの松の場所で引き返した」という伝承まで付与されている。西行は治承4年(1180)に実際に熊野から伊勢へ旅しており、このときの和歌が『山家集』で紹介されていることから、この地にあった名木の松に18世紀頃に西行の故事が付与され、意味の風景へと転換したと考えられる。

さらに、これら意味の風景は、起点に近い伊勢近傍では、人の営みなど日常世界(賑わい、暮らし、かつての賑わい)を、荷坂峠は伊勢紀伊国界として境界を、目的地に近い熊野近傍にあっては異世界(旅の伝説、旅の苦難、伝説、奇異、絶景)を演出する内容を持っていることが判明した。つまり、熊野参詣道伊勢路は、伊勢から熊野までの間で、日常世界から異世界への旅を演出する仕掛けが施されていたことが明らかとなった。

また、これらの見所は、道が平坦で単調な部分に多く認められ、連続川越え区間や連続峠越え区間においてはほとんど認められないことから、礼拝施設の機能を補完



※ 地形を明示するため縮尺は標高 2 万分の 1、距離 1,000 万分の 1 で表示。

図5 礼拝施設と見所の立地

し、巡礼者が歩くのに飽きさせない仕掛けとして機能していたことを指摘した。

表1 各区間における視対象記述数の上位5項目

	第1区間	第2区間	第3区間	第4区間
1位	道	川	道	川
2位	川	道	建築物	道
3位	人物	人物	海	海
4位	建築物	建築物	食物	時節
5位	道具	野	川	草木

表2 各区間における視対象タイプ数

タイプ名	第1区間	第2区間	第3区間	第4区間	総計	実際の位置
視対象少	3		1	4	8	
設置物+建造物	3		2		5	
至近景(建築物・野)	2		3		5	
設置物・野・海以外	2				2	
草+建築物	1				1	瀧原宮
野	1				1	長者屋敷
道中心			1		1	連続峠越
道・川・至近景中心		1	1		2	連続川越尾鷲付近
道+海			1	4	5	
建築物+至近景			1		1	日輪寺
海+道+営み			1		1	連続峠越
山			1	1	2	清水寺 鬼が城
山注視				1	1	花の岩や
総計	12	1	12	10	35	

5. 巡礼者の体験

第5章では、巡礼者の巡礼体験解明を目的とし、巡礼者が巡礼路上のどの位置で何を目にし、どのような感情を持ったのかを明らかにすることを試みた。

研究方法は、巡礼者が記述した17世紀から19世紀の道中日記から、視対象と感情にかかる語句を抽出した。そのうえで、先の第4章で検討した結果を踏まえ、伊勢山田から新宮までの行程を地勢によって4区間(伊勢山田から長者屋敷跡の平坦区間、長者屋敷跡から伊勢紀伊国界までの連続川越区間、伊勢紀伊国界から木本までの連続峠越区間、木本から新宮までの海浜区間)に分割し、区間ごとに巡礼者が注目した対象物、巡礼者が発露した感情を把握した。

まず、視対象について抽出した語句を既往研究を参考に、人物、食物、道具、設置物、建築物、道、動物、草木、時節、川、野、山、海、空の14項目に分類し、さらにその記述された位置を特定した。

次に、記述数の多かった上位5項目の比較を行った(表1)。まず、全区間を通じて多いのは道と川に関する記述である。川は歩く際の障壁となることをふまえると、道と川の記述の多さは巡礼旅が徒歩による移動であるという特性を反映していると考えられる。第1・第2区間における人物の記述は、それまで一緒に旅をしてきた旅仲間と別れる記述によると考えられる。第3区間では建築物や海、食物が多く出現する。建築物や食物の記述は、宿や茶屋にかかるものが多く、海は各所で記述される。さらに第4区間では、海、時節、草木の記述が上位をしめる。これは、海、松原、晴天や雨天といった気象状況が一体となった眺めの記述によると考えられる。

さらに、各区間の視対象の傾向を把握するため、主成分分析を用いて要素を縮約した上でクラスター分析を行い、視対象をタイプ分けした(表2)。

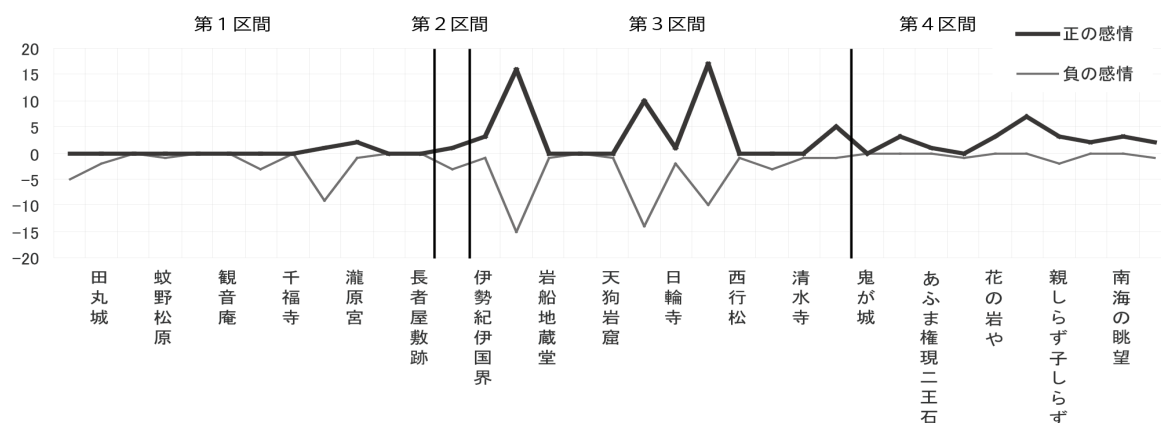


図6 感情発露内容の変化

すると、第1区間では近景中心、第2区間では道・川・至近景中心、第3区間においては、近景に加えて道の要素が増加し、第4区間では道+海の要素が中心となることが判明した。さらに、タイプとして1箇所もしくは2箇所しか存在しない箇所について検討すると、それらは近世を通じて紹介される礼拝施設4箇所（瀧原宮・日輪寺・清水寺・花の岩や）と重要な見所2箇所（長者屋敷・鬼が城）、さらに連続峠越・連続川越区間であり、こうした地点・区間が特異な眺めの体験を提供していることが判明した。

さらに感情の中身について検討すると（図6）、第1・第2区間では巡礼者同士の別離の情や旅路への不安が吐露され、マイナスの感情が優先する。第3区間の連続峠越区間では、坂道での苦しさに伴うマイナスの感情が発露される一方で、峠で目にする眺めの美しさや、宿泊施設に到着したときの安堵感にともない、プラスの感情が発露される。これは第3区間で建築物や食物が視対象に登場することに対応すると考えられる。さらに第4区間の海浜地帯に至ると、眺めの美しさを賞賛するプラスの感情が多く見られる。これは、視対象で海が増加することに対応すると考えられる。

このように、伊勢山田から新宮までの巡礼旅は、徒歩旅行という特性に起因して道や川に常に注意を払いつつ、旅の同行や旅を支える人々の営み、海や木々が織りなす眺めなど、巡礼旅をとりまく「風景」に注目して旅を進めており、それら風景と巡礼者の感情は密接に関係していることが明らかとなった。こうした巡礼体験は巡

礼者に心理的な変化を与え、新宮まで歩きとおすうえで重要な役割を果たしていたと考えられる。

6. 熊野参詣道伊勢路の価値

第6章では、以上の分析に基づき熊野参詣道伊勢路における巡礼旅において、礼拝施設および見所と巡礼者が体験した風景および感情の関係を整理し、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ機能など既知の価値以外の価値について考察を行った。

研究方法は、第2章から第5章までの結果およびそれらの関係を整理し、熊野参詣道伊勢路全体の価値を考察する。また、既往の価値の記述と、この研究で明らかとなった価値とを比較することで、新たに判明した価値の内容を明確化する。熊野参詣道伊勢路の価値の記述については、巡礼という行為の中で巡礼者が体験する出来事の順に記述を行う（図7）。本研究の成果に基づく価値の記述は以下のとおりとなる。

「近世に熊野参詣道を旅した人の多くは、伊勢参宮の後、引き続き西国三十三所巡礼を行う巡礼者であった。彼らは伊勢神宮へ参詣の後、熊野参詣道伊勢路を利用して最初の巡礼地（札所）である熊野三山のひとつ、那智山青岸渡寺へむけて巡礼旅をはじめた。

巡礼者は道中案内に紹介された基本的な経路に従って巡礼目的地を目指した。また、その途中、礼拝施設への参詣や、渡河地点での舟渡し利用などのために基本的な経路とは別の経路を選択的に利用することが出来た。巡礼者は途中、礼拝施設（観音庵、千福寺、瀧原宮、岩船地藏堂、天狗岩窟、日輪寺、清水寺、花の岩や）に遭遇する。礼拝施設は巡礼の目的地や出発地で

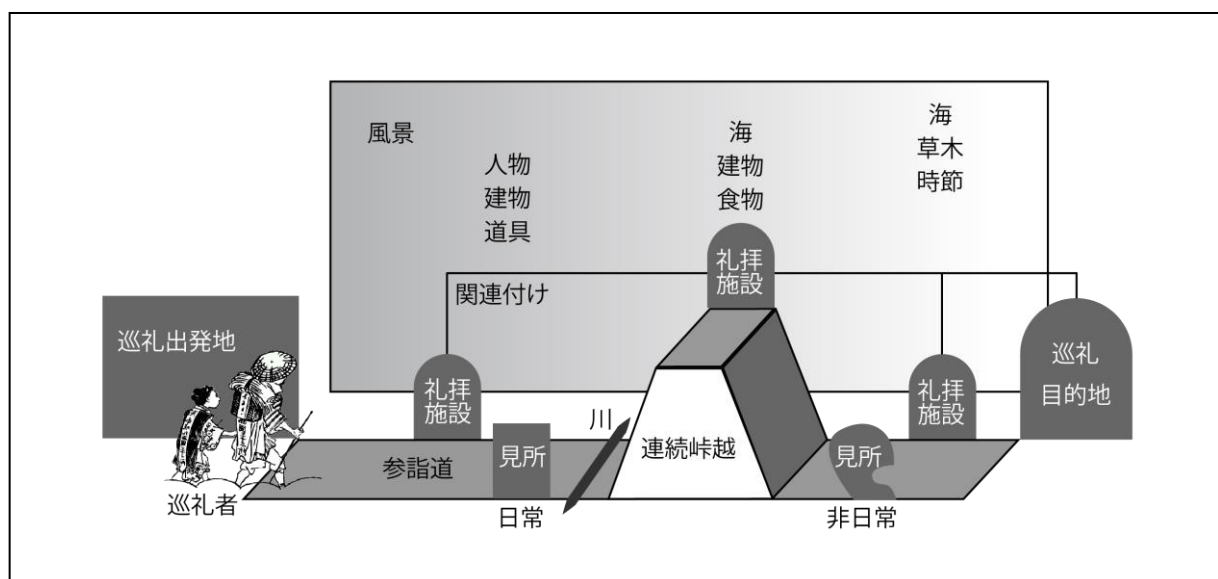


図7 熊野参詣道伊勢路の価値の構成要素

ある、熊野・伊勢・西国三十三所巡礼に関連付けられており、巡礼者はこれらに参詣することで、自らの歩く道が参詣道であることを確認した。また、巡礼者は道中案内の記す礼拝施設以外の見所(田丸城、蚊野松原、長者屋敷跡、伊勢紀伊国界、西行松、親しらず子しらず、鬼が城、あふま権現二王石、南海の眺望)を目にする。それらは、地理や文学、故事、伝説、宗教などに関連する意味を与えられ、日常世界から非日常世界への旅路を感じさせ、旅に不慣れな巡礼者に旅を続けさせる意欲をわかせた。巡礼者は旅の中で様々な風景に出会う。伊勢に近い所では人や町を中心とした風景が展開し、連続峠越えでは苦しい急な坂道やそれを緩和する峠からの眺め、茶屋や宿屋での憩いといった風景が展開する。さらに、新宮に近づくと、海と木々がおりなす眺めを中心に風景は展開する。旅慣れない巡礼者は、これら風景に接して不安から喜びへという心理的な変化を体験し、旅を続けることが出来た。そして巡礼者は熊野三山の1つ熊野新宮へ到着し、さらに西国三十三所巡礼の旅を続けた。

熊野参詣道伊勢路はこうした巡礼者の旅が近世を通じて行われた場所である。これら道、礼拝施設、見所、風景はいずれも熊野参詣道伊勢路において行われた巡礼旅を理解する上で欠くことのできないものであると考えられる。」

以上の価値の記述内容と国の史跡指定詳細解説文、世界遺産登録推薦文の示す熊野参詣道(伊勢路)の価値の記述をと比較したところ、価値の内容がより詳細に把握できていることが明らかとなった(表3)。この価値の記述方法について、既往の方法と本研究の方法を比較すると、既往の価値の記述方法は、空間的・時間的な位置づけに基づく価値を記述するものであり、いわば、意味俯瞰的価値と呼称すべきものであった。一方、本研究が提示した価値の記述方法は、人の行為・脈絡における位置づけに基づく価値を記述するものであり、いわば脈絡的価値と呼称すべきものである。その結果、

表3 熊野参詣道伊勢路の価値記述比較表

本研究に基づく価値	国指定理由文	世界遺産登録推薦文
巡礼者	△	○
巡礼路	△	△
礼拝施設	△	△
見所	×	△
風景	×	△

※○は記述有り、△は一部記述あり、×は記述なしを示す

様々な構成要素を一連の遺産として記述することや、意味俯瞰的価値の記述方法では明らかにし難い構成要素の価値の解明などに適することが明らかとなった。

7. 結論と今後の課題

第7章では、本研究で明らかにした内容を総括する。

まず、巡礼という熊野参詣道に価値を与えた行為の視点から、熊野参詣道伊勢路の価値を構成する要素を明らかにした。その構成要素とは、複数の選択肢をもつ伊勢から熊野につながる道全体であり、その道が参詣道であることを明示する礼拝施設群である。さらに、礼拝施設群を補い、巡礼者に旅を続ける意欲を湧かせる見所や、巡礼者が旅の途中で出会い、巡礼者の感情を惹起する、人、食、宿、町、木々、海といった要素からなる風景である。こうした構成要素の複合体により、熊野参詣道伊勢路の価値は示されることを明らかにした。

次に、文化遺産としての巡礼路の研究においては、価値の記述方法を従来とは異なる方法によらなければならないことを提示した。これまでの文化遺産の価値の記述は他の文化遺産との比較など意味俯瞰的価値を中心に記述していたが、人の行為・脈絡の中に文化遺産を位置づける脈絡的価値の記述を行うことで、多様な遺産の構成要素を一つの文化遺産の価値として記述することを可能にするモデルを提示した。

さらに、熊野参詣道伊勢路においては、現在特定の区間の道のみが文化遺産として把握されているという現状を踏まえ、熊野参詣道伊勢路の価値を今後保護するにあたっては、本研究で指摘した史跡指定範囲以外の道や道以外の構成要素についても同様に保護していく方策を検討する必要があると結論づけた。

主な参考文献

- 1) 伊藤 弘：「近代の松島における風景地の整備と眺めの関係」『ランドスケープ研究』74 (5) 2011
- 2) 伊藤文彦：『熊野古道伊勢路を歩く～熊野参詣道伊勢路巡礼』2015
- 3) ITO FUMIHIKO : “Study on Pilgrimage Route through Multi-Disciplinary Research” Young Researchers International Conference, Tsukuba 2015
- 4) 田中智彦：「巡礼の成立と展開」『日本の宗教文化』上 2001
- 5) 塚本 明：「道中記研究の可能性」『三重大史学』8号 2008
- 6) 西田正憲：『瀬戸内海の発見』中公新書 1999
- 7) 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会：『世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道』2005
- 8) 三重県教育委員会：『歴史の道調査報告書 I 熊野街道』1981